

23. 「虫」を考える

2026/4/1 白子隆志

世界でもっとも数の多い動物は？生物としては細菌や植物ですが、動物の中ではやはり「虫」・昆虫でしょうか。「アリ」だけでも 1000 兆匹いるといわれているので、想像するだけで地面が真っ黒になりそうです。私の兄はカブトムシ採り名人で小学生の頃は夏休みになるとカブトムシをラジオ体操前の毎朝採りに連れていかれてたくさん採っては駅前の UNY で売っていました(我が家は家具屋だったのでおがくずがたくさんあったこともあります)。話は変わりますが、飯田駅近くのシルクホテルは昔、製糸工場だったので、繭の中のサナギを買っておやつに食べていた(食べると必ず鼻血が出たもので栄養豊富なのでしょう)。

「虫」に関することわざが多いことに皆さんも気づかれていますと思います。辞書を引くと、虫は「脱皮」や「変態」を繰り返すことから、「変容」「再生」「成長」の象徴とされてきました。虫の姿や行動は人間の精神的な変化や、人生の転機を示すサインと考えられ、蝶や玉虫のように変態を経て美しくなる虫は魂の再生や新しいステージへの移行を意味しています。

(勧善懲悪の仮面ライダーも変身していましたね)

① 「腹の虫がおさまらない」「疝の虫」「虫が騒ぐ」「虫の知らせ」

昔は人間の身体の中には虫がいて、それらの行いが感情や体調に影響していると考えて表現してきた。果たして我々のお腹の中にはどんな虫がいて考えられていたのだろうか。(寄生虫はいたのは確かですが)

② 「虫がいい」「虫が良すぎる」

物事を何でも自分にとって都合のいいように考えるさま。自己中心的で身勝手であるさま。「虫のいい」ともいう。良い虫も悪い虫もいるようですね。でもこんな人とはかかわりあいたくないですよ。

③ 飛んで火にいる夏の虫

自分から進んで危険や災難の中に飛び込んでいくことのたとえ。灯火の明るさに引き寄せられて飛んできた夏の虫が、火に飛び込んで焼け死んでしまうとの意から。悪いやつらのたくらみに乗ってしまった善良市民が犠牲になるような話ですな。災害では二次被害は出してはならないですから。

④ 一寸の虫にも五分の魂

どんなに小さくて弱いものにも、それ相応の意地や考えがあるので侮ってはいけないということ。わずか一寸の虫でもからだ半分の五分の魂があるとの意から。少数派の意見もきちんと拾い上げてほしいですよ、自民党!

⑤ 蓼(たで)食う虫も好き好き(世の中の道理をついていることわざで個人的に好き)
人の好みはさまざまであるというたとえ。辛い蓼の葉を好んで食べる虫もいるように、人の好みはいろいろあるとの意から。こんな人と、こんな人が夫婦なんだと不思議に思ったこともあり、世の中はいろいろな人がいて、好みも様々でうまくいくと思ったことがしばしばあります。今でいう「多様性」のことわざかな。

⑥ 夏の虫、氷を笑う

見識が狭い者が偉そうにすることのたとえ。夏の間だけ生きている虫は、氷が何なのかを知らないくせに氷を笑うとの意から。「夏の虫、氷を知らず」ともいう。いかにも世間を知っているようなふりをして、実は世間知らずだったという、これは自分に言い聞かせたいことわざです。皆さんは大丈夫ですか？

昆虫は、将来の食糧危機の際に重要なたんぱく源として注目されています。昔と違ってそのままの形で食べたいとは思いませんが、決して「無視」できない存在ですね。
まだ虫の季節ではありませんが、虫は人間と深くかかわっています。誰の心の中にも「虫」がいて、「善」「悪」どちらにも変わります。他人からはその虫は見えませんが、あなたの態度次第で「虫酸が走る」「虫が好かん」と言われないようにしたいものですね。

新入社員の皆さんは慣れるまで大変ですが楽しく一緒によろしく願っています。



ウガンダで突然発生した羽アリ、現地のスタッフは食べるために袋に集めていた
(昔はハチの子を生で食べていたが、今回はさすがに食べられなかった)2018年



ケニアのアリ塚(3mくらいの高さ)